吾妻名所（竹屋の渡）

泉鏡花作

全一章

向島の櫻まだ咲かざりし今年なり。墨田堤に蝶の飛ぶさま眺めむとて、親しき年上の友一人誘ひて行きぬ。奥山は知らず淺草の境内をめぐり出でゝ、此處ぞ今戸よといふまゝに、早や鐘ヶ淵の煙も見えたり。

山谷を左に、竹屋の渡し越えむとて切符購ひぬ。渡船は靜にもやひたり。老船頭一人うしろ向いて船端に腰掛けつ、若き男の風呂敷包も持ちたるが船の中に立ちて吾妻橋の方打眺む。いま一人下に居て、此方向きたるは年若き美人なり、と見る時、桟橋をわが友とすれちがひさま、船番の假屋の方に出で行きしは、年二つばかり其よりも姉ならむ、婀娜たる女なり。

潰島田に金脚の簪細をさして小紋縮緬の羽織しつく

りと着こなしたる、船なる女の連なるべし。何とて然はあわたゞしく陸には上りたるなど思ひながら乘りぬ。

居所も定め敢へず、駒下駄の音響き、棧の板輕く鳴りて、きら／＼と遊絲の立つ中に、派手なる長襦袢の裾蹴うつして、眞白き素足飛々に、二つ三つ歩を運びて、急はしく又船に歸り來つ。渡番の小屋に火を借りたるなり。

「はあちやん、つけて來たよ。」

とて、小さき銀煙管手に提げたるを、若き方の手に與へつも、帶の中搔い探りて、緋鹽瀬の裏つけたる莨入拔いて取りぬ。人の往來未だ繁からぬ頃なれば、然までは乘合を待むとせず、老船頭は丁と棹を突きて岸を離れたり。

「あら消えてよ。」

「お見せ。」

煙管を取りて、力強く吸ひしが消えたるなり。

「まあ。」　……　とばかり、二人は本意なき状しつ。友も我も莨をこそ袂にしたれ、此方も詮方なき同士にこそ。

洋々として水高く、むかびなる土堤も低く見ゆ。中流に出でたる時、日の光眩く射したれば、彼の年上なるが白地の手拭取出でゝ額に翳しき。恁りし時、十五六人の乗込みたるがむかひより來てゆら／＼と行違ふ。坐ながら洋傘さしたるもの、莨飲むもの、等しく此方に目を注ぎたれば、美人は折りたるまゝ其の手拭を鐵拐にこそ肩に掛けたれ。

岸近くなるまゝ若きは急る状して、

「あゝ、呑みたい、恁麼に好い景色だのにさ、惜しいことね。」

と斷えずいふ。姉なるは微笑みて、

「しと、那様に呑みたいのかねえ。」

「あゝ、呑みたいわ。水でも可いわ、ねえ、姉さん。恁麼好い景色の、此處へ身を投げたら何うだらう。」

「然うねえ。」

と言ひつゝ弗と立ちて水をば見つ。船は早着かんとす。岸の柳流れ／＼て黒き影を宿せる中に、美しき顔の沈みつゝ、衣の色もあざやかに影澄みて映りしを、われ見たり。友も見たらむ、と思ひし途端身を顫はしながら莞爾とし、冴えたる聲にて、

「でも一人ぢやあいやだわ。焦れつたいわね。」

と言ひ棄てゝ、蓮葉に二人手を繋ぎ、引合ひて、足早に衝と出でつ。走りて土堤に登りたり。

櫻の梢に其姿かくれし時、心着きて、友とわれ顔を見合せぬ。

渠の言へるやう、「何うだい、とにかく意氣なことを言つて暮すぢやないか。」

【完】